

スウェーデン現代介護事情 夕刊紙 EXPRESSEN でサーラ事件を読む

スウェーデンの大衆向け夕刊紙 Expressen は、ストックホルム市近郊ソルナ市の老人ホームで起きた介護スキャンダルを熱心に報道した。勿論、他の新聞も報道したが、Ex 紙の追い方は際立っていた。

サーラの内部告発に端を発して、市から経営委託された火元の老人ホーム経営者のいい訳、市長の逃げ腰の答弁、市担当幹部への責任追及、国会での党首討論を聞いてサーラの評定、福祉担当市議会議員の無能ぶり暴露、別の施設の内部告発、読者の市政への怒りの声、告発の勇気を称えられて奨学金を授与されるサーラ、『今年のスウェーデン人』に選ばれたサーラ、サーラの名前をつけた内部告発奨励法の制定……と、息つくひまもなく記事を連発した。

関係記事は、私の調査を手伝ってくれた大学院生の中村千恵子さんに数えてもらったら、実に 123 本にものぼった。

かつて朝日新聞や週刊朝日の記者として働いていた私は、同紙記者たちの、きめこまかくてしつこい取材に強く心引かれた。

サーラをめぐる出来事は、スウェーデンの高齢者介護事情がわかるという意味でも、じつに面白い事件である。出来れば全てを翻訳してみたかったが、それほどの人的・財政的・時間的ゆとりはなかった。

かくして、以下のような拾い読みとなった。(太字は見出し)

97.10.14

介護スキャンダルを内部告発
サーラの抵抗が市長を動かした
市長「介護は 10 日間で改善されねばならない」
介護施設が床ずれつくる(テレビ画面の写真紹介)
ソルナ市は民間委託で 3500 万クローネを浮かす

テレビの画面に映し出される無人の廊下。部屋に置き去りにされた一人ぼっちの高齢者の助けを求める叫び声。

これは、ここで働き始めて間もなく 2 ヶ月になるサーラ・ヴェグナートが、慣れっこになってしまった光景である。

23 歳の彼女が語る。

「信じられないでしょうが、彼らはああやって、ずっと叫んだまま放って置かれるんです。一番悪いのは、職員が慣れっこになってしまって、何の感覚もなくなってしまうこと。自分がそうなるなんて、思っても見ませんでした」

床ずれの映像。ほとんどケアされていないようで、壊死を起こしている。

「とにかく、何よりも、充分なお世話をするだけの人手がないんです。ここでは、介護ということがまったく忘れられていて、まるで野戦病院で働いているような感じがします」

彼女はこれまでの5年間を高齢者介護の職場で働いてきた。安定した職場を求めて、県の病院職員を辞め、ここにきた。

県ではすべての部門で予算が削減されており、サーラはこちらのほうが良い職場に違いないと思っていた。しかし、現実は違った。

ポールヘムスゴーデンには、4つのユニットに21人ずつ、計84人の高齢者が暮らしている。各ユニットには6人の職員がいるはずが、4人しかいないことがほとんどだった。

仕事はとてもつらかった。要介護度が高い人が多く、薬を配るのから、炊事洗濯掃除までしなければならなかった。機械浴の装置もない。3週間もシャワーを浴びられなかつた利用者がいた。体を持ち上げるリフトもない。食器洗い機もない。掃除をする暇もない。

この経営会社であるISSケアが掃除会社を使うまで、床は埃で真っ黒だった。

職員は、この惨状は、経営したばかりで慣れないからだと思っていた。彼らはがんばった。ベストを尽くそうとした。しかし、それにも限界があった。

職員たちは職場のチーフに訴えたが、よその老人ホームでは同じ職員数でうまくいっている、と言われただけだった。やがて、もっと人手が必要だとわかったので、少し職員は増えた。しかし、そのほとんどは何の教育も受けていない人々だった。

「とうとう私は耐えられなくなって、退職して県職員に戻ることにしました。だから、外に出て話したんです。それに、私の後ろには残りの職員全員がついていましたから」

実は、ポールヘムスゴーデンを去るのは彼女が初めてではない。9月1日に経営がスタートしてから、6人の職員が耐え切れなくて辞めた。

「仕事で、たくさんの人人が泣いていました。私は、自分の母や祖母をここには入れたくない。絶対に」

ソルナ市の福祉担当市長アンデシュ・ゲルナーは、10日以内に事態が改善されなければ契約を打ち切る、とISSケアに通告した。

ソルナ市はコスト削減のため、スウェーデン中でホームを経営するISSケアを委託先に選んだ。同社は、入札した時、結構な目標と質をうたっていた。

アンデシュ・ゲルナーは、彼自身ポールヘムスゴーデンの問題がこんなに大きなものだったとは知らなかった、と言う。もっとフォローしておくべきだったと思っている。

市は経営がスタートしてから、施設側とたったの1回しか会っていなかった。

「彼らがどのように 10 日以内に改善するかはわからない。彼らは最初に、質の保証を誓つてゐるんだ。民間委託云々が問題なのではない。われわれが信じた会社が、目標を達成できなかつたのだ。入居者は 10 月 24 日まで移動させることはしないが、精神的にも肉体的にも傷を受けないようきちんと介護されなきゃならない」

ソルナ市は ISS ケアと契約することにより、3 年半で 3500 万クローナ(約 2 千数百万円) を節約したことになるはずだった。

「でも、われわれが質より節約を優先させることはあります」
と、ソルナ市福祉行政担当者マルガレタ・ヘリンは語る。

「今日われわれは会社と話し合いました。彼らはどのように問題を解決するかを示し、将来の計画を見せてくれました」

それで、あなたは手抜き介護を知っていたのですか？

「不安な点があったのは知っていました。施設オープン時にトップになるはずだった女性が病気になつてしましましたね。でも、病気になつてしまつた人を助けることはできないし……」

最初から、すでに職員が少なすぎたのでは？

「でも、会社は今職員を追加しました」

でも多くの職員が辞めていきましたね？

「ええ、私が知る限りでは 4 人やめたはずです」

そんなにたくさん辞めていくということは、何らかの間違いがあったはずですよね？

「ええ、それはこれから改善されることになっています」

お年寄りが 3 週間も入浴できないのは正しいと思いますか？

「それにはちょっとコメントできません。それが本当かわからないので」

これからどうするつもりですか？

「われわれはこれから、彼らが言ったような改善がなされるかどうか監視していきます」

改善がなされなかつたら？

「そのときは ISS ケアとの契約を打ち切ります」

Expressen の記者は、ポールヘムスゴーデンをたずねたが、ISS ケア中央スウェーデンの責任者アン＝ソフィー・ホルメルツはノーコメントだった。

市議会の社民党(最大与党) リーダーであるカール＝グスタフ・スヴェンソンは、ソルナ市が ISS ケアを追放することを考えている。

「彼らはわれわれをだましたんだぞ。(追放が) 可能かどうかいま調べてるところだ」

しかし、その会社に3年間7500万クローナで『介護を売り渡した』のは市の福祉委員会である。市自体が運営した場合と比べると、650万クローナ浮くことになる。

市は14日、事件の前から介護の調査をはじめていたと弁解しようとした。Expressenは、福祉委員会のリーダーたちに聞いてみた。

ポールヘムスゴーデンのお年寄りへの手抜き介護を止めさせるため、あなたは何をしましたか？

委員長アンデシュ・ゲルナー（社民）「10月2日にISSケアが契約を守っていないという情報が入ったので、私が直接責任者とコンタクトをとって要望を伝えました。われわれは業務を監視するための人員を送りました」

副委員長スタッフ・トシュテンソン（国民）「TVで流れた映像については、まったく何も知りません。責任者が辞めたのは知っていたが、なぜかまではわかりません」

副委員長リセロッテ・ペルスランド（国民）「このことについては知りません。先週の日曜日に情報はありました」

スヴェン・シナンデル（穏健）「何も知りませんでした」

ビルギッタ・ブックホルト（穏健）「今日の夜、委員会の会合があるので、その前には何も話したくありません」

マイ・ロンクヴィスト（穏健）「私は2時間前に外国から戻ってきたばかりで何も知らないの。アンデシュ・ゲルナーに聞いたらいいでしょう」

インゲル・スヴァルステット（社民）「介護スキャンダルについてコメントしてもいいけど、やめておきましょう」

スーネ・リンドショー（社民）「私は何もしていないけど、もちろん自分は責任を持たないといけない」

バルプロ・ビヨーク（左）「私の党員仲間が10月2日にポールヘムスゴーデンに行って、彼は委員長に直接警告をしていました」

カーリン・ヴェローケルはスキャンダルの渦中にあるポールヘムスゴーデンのプロジェクトリーダーだった。彼女は、職員を増やそうと努力し続けた。現在、彼女は4週間病気で休んでいる。

カーリン・ヴェローケルは、9月1日のポールヘムスゴーデンのオープン準備で、春から働きづめだった。そのための高齢者福祉の燃え尽き症候群のようだ。

彼女は、重大な手抜き介護の暴露にはコメントしたがらず、ただ「あの映像はひどかっただわ」と言つただけだった。

彼女はまだ ISS に雇われており、現在は別の施設のチーフである。

本紙の取材によれば、彼女は長い間、施設職員をもっと雇おうと戦っていたのだが、その要望は会社の上層部に「金がない」と言う理由で握りつぶされた。情報筋は、ソルナ市は会社側や市独自のプロジェクトグループから、職員の問題について情報を得ていたらしい。

「スケジュールや人員配置がどんなものなのかは、ソルナ市も会社も知っていた。誰もそれに反応しなかったんだ」

97.10.15

政治家「我々は何も知らなかった」

サーラ 内部告発のあと脅される

サーラ 涙ながらに帰宅

社長「サラと会いたい」

施設で暮らす85歳のマルタ

息子「施設を出るときとても暗い気持ちになります」

昨日、サーラはヒロインとなった。自宅の電話は鳴り止まなかった。花束も贈られた。午後になって、いつものように仕事場に出向くと、そこには報道陣がまっていた。

くびになると思いますか？

「そんな間違ったことが起こるはずないわ」

しかし21時過ぎ、Expressen紙記者が帰宅しようとする彼女に会った時、彼女は目に涙を浮かべていた。

サーラは、すでに会社を辞めることを告げている身だが、会社の地域責任者に脅されることになった。今、彼女は病欠を考えている。

夜になって、ISSケア中央スウェーデンの責任者アン=ソフィー・ホルメルツが、仕事中の彼女のもとにやってきたという。

「彼女は、プライバシー保護条項を破ったかどで家族が私を訴えることを考えている、って言つたわ」

誰かの家族が、あなたとコンタクトをとってそう言った事実はありますか？

「いいえ」

アン＝ソフィー・ホルメルツはさらに、サーラがどういう気分かを聞いたと言う。

「私は、元気ですよ、って言ったの。そしたら彼女は、あなたがもう満足してたらいいんだけど、ですって」

サーラは帰りがけに、入居者から花束をもらっていた。同僚の1人も一緒にいた。その同僚は言った：

「彼女が外に出てしゃべったことは、すごく勇気があることだと思うわ。私は彼女の行為を支持しています」

市公務員労働組合の組合長であるイングリッド・エフライムソンは、サーラの勇気をたたえて言った。

「福祉の現場で欠陥があったことを指摘することは、非常に重要なことです」

サーラは、今は仕事に耐え切れない気分だけど、闘いは続けると宣言した。Expressen紙はアン＝ソフィー・ホルメルツにコメントを求めたが、彼女は電話で「今ちょっと忙しいの」といって、何も答えなかった。

97.10.15

親会社トップは脅迫を否定

「もし誰かがサラを脅したのなら、それは最も野蛮なやり方だよ。それがほんとだとしたら、ひどいことだ」

ISSケアの親会社であるISSスウェーデンのトップ、アーネ・ペデルセンは言った。彼はスウェーデンに20ヶ所ある同社経営の施設の最高責任者だ。

「あなたは、ほかの施設でも同じようなことが起こっていないと保証できますか？」

「いや、できない」

「知らない、ということですか？」

「ええ。しかしこんなことを聞いたのは、ほんとに初めてなんだ。私も、ほかのみんなと同じように、なんてひどい状態だと思ったよ。でも、ほとんどの私の施設はそれなりに機能している、とかなりの確率で確信しているけどね」

「（あのひどい映像を見て）私だったら老後にあそこに住みたくない。それどころか、ほかの誰にもすんでもほしくないね」

彼は大変革について語った。

「われわれは将来もっと違うやりかたをしなければなりませんね。全体的な介護と職員の状況については議論することが重要です」

ポールヘムスゴーデンの責任者を更迭することを考えていますか？

「その質問に答えられない。まずは、職員に会わねば。多分、今日このあとにね」

ソルナの政治家たちは、この内部告発のあと、ISS ケアを追放する動きを見せているが、アーネ・ペデルセンはそうならないことを願っている。

「われわれは政治家たちと同じテーブルについて議論しなきゃいけない。われわれはきっとよい解決策を見つけられるはずです」

彼は、政治家自身にも責任があるという。

「1ヶ月近く前に、彼らはうまくいっていないと情報を知らされていたんだ。しかし、誰もそれに反応しなかった」

しかし、あなたは最高責任者でしょう？ あなたの施設で、入居者があんな状況におかれていることを知らなかつたんですか？ あなたの責任とは何なのでしょうか？

「そんなに深刻な状況だとは知らなかつたんだ。しかしもちろん私には、大きな責任がある。職員と責任者の間にきちんとコンタクトが取れてなかつたんだと思う」

これは能力の問題ですか、お金の問題ですか？

「こうなってしまったのは両方の不幸なコンビネーションだろうね」

97 . 10.16

サーラの勝利

社長「あなたの勇気に感心しました」

（サーラが最高責任者と握手する写真）

昨夜、サーラ・ヴェーグナーが最高責任者のアーネ・ペデルセンと会った。彼は彼女の勇気をたたえ、彼女に何も起こらないことを確約した。

アン＝ソフィー・ホルメルツとは話したのですか？

「ええ、話しました。たとえチーフでも、人はたまに、言わなきゃいいことを言ってしまうもんですね。言いたいのとは違う言葉が口から出るんだよ」

「私はただ、お年寄りがよい環境を得られるようにしたかったんです」

「その目標設定は、われわれと同じだ。あの状況は批判しなきゃいけない」

ペデルセンは、サーラと彼がこの点では完全に一致していると言った。一方のサーラは、ISS の内部は、彼と同じぐらいの高尚な情熱を持っていないのでは、と指摘した。

「確かに、責任者の中には私と同じ価値観を持っていない者もいるがね」

サラは、仕事を続けることを明言した。責任者のアン＝ソフィー・ホルメルツに脅しを受け、また一部の人間が彼女に冷たくしているとしても。

「私は勇気をもってあと10日残っている仕事を勤め上げます」

「大歓迎だ」

この短い会談は両者の握手で幕を閉じた。だが、ポールヘムスゴーデンの問題はまだ終わっていないことを、2人とも知っていた。

97・10・19

高齢者は最安値で落札した業者に売られた（コラム）

97・10・20

ソルナではいまも劣悪介護がはびこっている
(他の施設のスキャンダル)

97・10・24

ソルナ市では
スキャンダルを起こした企業が
ホームヘルプサービスを請け負うことになった

97・10・25

サラ インタビュー
「本当のことを話しただけなのに……」
「間違ったことは指摘しなさいと、両親から教えられた」

97・10・31

社説 劣悪介護を根絶しよう！

97.11.1

死亡した患者の家族が警察に通報

70歳のバッティル・スクーグが先週水曜日にソルナ市のポールヘムスゴーデンで亡くなった。彼にはナースコールも監視も水もなかった。

「彼はほんとに脱水症状だったのよ」

娘のアン＝ルイスと息子のトールビヨーンは、父親の死を警察に通報した。

3人の入居者が施設で亡くなり、1人の女性が入居時にはなかった壊疽で今週手術を受けた。バッティルはそのうちの一人である。子供たちは、適切な医療が行われていたか調査するよう求めた。彼らは、父親が正しく介護されていなかったと主張し、訴訟の準備もはじめている。

「彼は死ぬ前に何日も下痢が続いていた。私がそれをポールヘムスゴーデンの看護婦に話すと、彼女は『もっと前から点滴を打っておくべきだった』と言ったんだ」

「父は9月にあそこに入居するまでは健康だったわ。先週の水曜日に行ったときには脱水症状を起こしていたのよ」

「あんな脱水症状に1日でなるはずがない」

バッティルの恋人であるエイバー・ホルムベリは、日曜に彼を訪問するはずだったが、風邪をひいて行けなかった。

「でも代わりに行った友達は、元気だった、って言ってたわ。日曜から水曜の間に、なんであんなに容態が悪くなるのか理解できないわ。手抜き介護としか考えられないわ」

彼らは来週にも訴訟の手続きを進めると言う。

しかし、ISSケアの責任者であるアンデシュ・リンドブラッドは、ポールヘムスゴーデンで起こったことに、もうISSは何の責任もないという。なぜなら、ソルナ市が10月24日に運営権を同社から取り上げたからだ。

「10月24日からのことは市が責任をとるべきです」

責任者「ノーコメント」

Expressenの記者は行政の責任者であるマルガレータ・ヘリンに電話したが、週末だと言う理由でコメントはもらえなかった。それで、3つの質問を彼女の郵便受けに入れた。

ポールヘムスゴーデンの職員数はいまだに増えていません。なぜですか？

先週水曜日に70歳の男性がなくなりました。彼の娘と息子によると、脱水症状

で亡くなったようです。なぜですか？

家族の警察への通報に、あなた方は未だコメントを出しません。なぜですか？

ソルナ市の広報責任者がわが社に電話してきて、明日の朝まではマルガレータ・ヘリンも市の誰も、質問に答えることはできない、と告げた。

「月曜の朝早く、われわれは医者に会います。それから何が起こったのか調べるのです。死亡事故となると非常に重大な問題なので、コメントすることには慎重にならざるを得ません。正しい情報を得たいと思います」

「職員の数は、家族会のたびに言ってきた事よ。いつだってちゃんとした返事はなかったわ」

ほかの入居者の娘は、誰も施設の職員状況について答えられないことを驚きもしなかった。

昨日最後の勤務を終えたサラ・ヴェーグナーも、まだ職員数は増えていない、と言う。バッティル・スクーグは彼女のユニットで先週亡くなつたが、そのことについて彼女はもう職員ではないので話せないと言つた。しかし彼女はポールヘムスゴーデンの大きな欠陥である『人手不足』について語つた。

「たまに何人か職員が配置されることもあったけど。でもそれ以上は何もなかつたわ」しかし、改善の方向には向かつてゐるという。

「職員にとってはスケジュールが楽になつたし、労働環境もましになつた。新しい機器も注文しているし」

「最後の日々はつらかった。たくさんの人人が私に背を向けていたわ」

97・11・2

会社への家族の質問3か条

なぜ職員を増やさないのか？

なぜ、先週、脱水状態で男性は死んだのか

なぜ、警察沙汰になったのにだまつているのか

97・11・4

サーラ 勇気称えられ奨学金もらう

昨日、23歳の准看護婦サーラ・ヴェーグナーが、ニルス・ベイエロート基金から3万

クローナの奨学金を受け取ることが、明らかになった。ニルス・ベイエロート基金は、社会政治分野で自立した勇敢な行いをしたものに奨学金を贈っている。サーラは10日ほど前に電話でその連絡を受け取っている。

「奨学金はためておいて、将来看護婦教育を受けるための資金にするわ」

ニルス・ベイエロートは社会的な医師であり、教授。わが国の麻薬撲滅運動の先駆者である。彼は67歳のとき、さまざまな脅しや障害にもかかわらず、麻薬中毒者の治療に打ち込んだ。その名を冠した基金は、1989年11月から奨学金を授与している。

97・11・6

サーラ 政治家の討論番組を論評

「みんな落第ね」

「無意味なことばかりしゃべってるわ」

サーラ・ヴェーグナートが告発した介護スキャンダルを受けて、国会で政党討論が行われた。これは国民党とキリスト教民主党のイニシアチブで行われ、サーラも国会で傍聴した。

その後、サラはもう一度 Expressen 本社で TV 放映された討論の録画をチェックして、各党の論客を 5 段階で評価した。

討論の後で、サーラは社会大臣のマルゴット・ヴァルストロームと立ち話をした。サーラは大臣に、もっと職員教育のためにお金をかけてくれるよう要請し、大臣もそれに同意した。

討論全体は、かなり退屈なものだった、とサーラは言う。

「アルフ・スヴェンソンだけが唯一のまともな論客だったわ。明確で、あいまいな言葉を使わず話していたもの。彼は問題を完全に理解していて、聞き手としてもわかりやすかった」

以下は各党の論客の点数とコメントである。

ローランド・ラーション（中央党）

「彼は自分の母親が施設でよくケアされていたと言うことを長々と情熱を込めて語ったけど、それで、彼はいまの状況に満足していたのかしてないのか、全然わからなかった。問題の解決にはなっていないと思うんだけど」

ラーション・レイヨンボリ（国民党）

「何で彼と国民党は討論の間『ナースコールはどれだけ長く鳴っていたのか？』なんてことしか言わなかったのかしら。床ずれや壊疽を TV で放映したのははじめてだ、なんて言っ

ていたけど、国会でこんな討論をするのだって初めてじゃないの！　国民党は福祉や介護のことによく話すけど、どれだけのお金をどうやって用意してどこに回してくれるのかしらね？　彼の話からは全然わからなかったわ」

ギュラン・リンドブラッド（穏健党）点数なし

「彼女は自分が看護婦だったと話したけど、それは黄金の60年代、70年代の話でしょう？　彼女は最近病院か施設に行ったことがあるのかしら？　そんな印象は受けないわ。薬について話してたけど、それが主題じゃないでしょう。建物についても話してたけど、それも主題じゃない！」

マリアンヌ・サミュエルソン（環境党）

「『お金は必要な分だけかけばいい（けちってはいけない）』って言ってたけど、問題をきちんと把握している政治家がいるってことはいいことだわ。私たちはもっと人材を必要としているんあって、お金の配分じゃないのよ」

アルフ・スヴェンソン（キリスト教民主党）

「高齢者福祉への情熱が感じられたわ。彼は『価値の保証（質を保証し、うまくいかないときは違約金を払う制度のこと？）』について話して、それはいいアイデアだと思う。もし彼が何もかも決めてたら高齢者福祉はもっとよくなるんじゃないか、とさえ思っちゃう。マリアンヌと同じように、彼は人材の重要性を理解している。今日のベストね」

マルゴット・ヴァルストローム（社会民主党）

「最初に職員の能力レヴェルを問題にしてたけど、私はやっぱり充分な人員配置だと思う。それから、普通の職員はみんな準看護教育を受けるべきだって言ってたけど、そのあと失業しちゃったら？（＊労働場所を確保することに触れなかった）討論のあと彼女に会ったけど、いい人で私の話を聞いて意見を理解してくれたようだったわ。問題を解決するために何かしてくれたらいいのだけれど」

エバ・ゼッテルベリ（左翼党）

「彼女はなんだか価値のあるようなことは言ってなかったと思う。彼女はずっと労働時間の短縮のことばかり言っていた。充分な人員が配置されていて余裕があれば私たちは喜んでフルタイムで働くわよ！　それでも1点あげたのは、彼女が私と同じく高齢者福祉の民営化に反対しているからよ」

97・11・12

カーリン・スヴァードがジャーナリスト賞を受賞

彼女はテレビ番組“Rapport”の中でポールヘムスゴーデンの手抜き介護の実態を告発したことを評価されて受賞した。

「おそらく高齢者福祉の問題点に人々の目を向けさせたことが受賞につながったんでしょうね」

賞を受けたいまでも、彼女の頭の中からポールヘムスゴーデンのことは離れないという。
「ほかのどんなレポートもあんなに心には残らないでしょうね。あの年よりたちはまだあそこにいて、何も変わっていないんですもの」

カーリンはこの受賞が、社会的レポート番組のステータスがあがることにつながれば、と願う。

「以前は、このタイプのルポタージュは隅に追いやられて「社会的ポルノ」なんていわれてきたわ。でも、私たちの仕事は、私たち自身の人生について扱っているの。こういうジャーナリズムが社会的地位を得ることは大事なことだわ」

（カーリン・スヴァードは、最初にサーラを取材して97年10月13日に特種としてテレビ番組で放映したジャーナリスト）

97・11・14

ISS ケアがソルナで新しい施設を運営

スキャンダルからわずか1ヵ月後、ソルナ市は老人ホーム Sfären の運営を ISS ケアに委託した。職員は抗議のため辞表を提出している。12月1日から ISS にケアが任される。スキャンダルが起きたとき、市長の一人カール＝グスタフ・スヴェンソンは、こんな会社を信用することはできないと言っていたが、今は違う。

「われわれは ISS 側と、何度も厳しい話し合いを重ねた。職員は6人増やされることに決まった。これでもう安心だ」

サーラ・ヴェーグナーによると、あなたはソルナでは絶対にあの会社には何もさせないと誓ったはずですが？

「いや、そんなことは言っていない。われわれは、ポールヘムスゴーデンできちんとしたケアをできない会社はいらない、と言ったんだ」

サーラはうそをついていると？

「そんなことは答えられない。私はその当時どういう風に言ったかを覚えていないから。

しかし、ほとんどの人は、あの会社も今は気を引き締めているだろうと思ってるんじゃないかな。われわれはもう1度チャンスを与えたいたのだ」

施設には“喜び・自由・安心”と言う言葉がネオンで輝いている。しかし、この施設が今ほど不安に包まれたことはない。施設で人員配置を扱う女性は言う。

「最初の職員の反応は一般の人と同じです。みんなおびえていました。でも多分、あの事件は会社のミスではなくて、介護を売った政治家のミスだったんだと思っています。彼らはケチり過ぎましたもの。今、ここでは会社を信じて残る派、会社に反発してやめる派の2つに分かれています」

彼女によると、12～15人の職員がスキャンダルを起こした会社の職員になることを嫌がって、これから約1ヶ月で辞める準備をしている。残る人たちは、大体が政治家に対して怒りをあらわにしている。

職員の1人は語る。

「彼らはあちこちで質について議論しています。でも結局、問題は金なのさ。ここで政治家と話し合いの場を持ったとき、彼らの本当に興味があったのは、僕らがISSをどう思うかってことだけだった。その後で気づいたんだ。彼らはもうとっくにどうするかを決めていて、僕らの意見を聞いたのは政治家としての体面を保つためだったんだってね」

カール＝グスタフ・スヴェンソンは、自分自身のことを信頼できる政治家だと思うか、という質問にこう答えた。

「それは半年後に市民が判断することだ」

あなたはISSのカムバックを許したことで政治家としての墓穴を掘ったとは思いませんか？

「それはサーラ・ヴェーグナーが言ったことだろう。私は答えたくないね」

彼はケアはいいものになるだろうと語り、彼自身も施設にたびたび訪問すると言った。

施設職員は彼を信じて言う。

「ISSケアもまさか自殺行為はしないでしょう。ケアはいいものになるだろうと思います」

97・12・12

社会庁・県庁のレポートが発表される

ポールヘムスゴーデンの手抜き介護事件に対する報告書が発表された。それに対し、サーラ・ヴェーグナーは「こんなことは最初からわかってたことだわ。でも誰も聞いてくれなかったのよ」と語っている。

社会庁のレポートでは、ソルナ市の医療責任看護婦（MAS）シャステリン・アスクルンドが名指しで批判されている。そこにはこう記されている：

「市の MAS が入居時に充分にフォローをせず、問題が明確になった時点で入居をとめなかつたことを、社会庁は非難する」

MAS 本人はこの件についてコメントしたくないと回答した。

また、ISS ケアの責任者アン＝ソフィー・ホルメルツも批判の対象である：

「早い時期に問題に気づいた時点で入居をストップるべきだった。」

そのほかには、人手不足、よい仕事をするための情報と機器の不足などを指摘している。

県のレポートでは、「ポールヘムスゴーデンの入居者は市の短期的視野に立った経済優先の姿勢に被害を受けた」と指摘している。

97・12・26

サーラ『今年のスウェーデン人』に選ばれる

（この賞は、スウェーデン国立ラジオ放送の視聴者の投票で決まる。サーラは前首相や人気作家を抑えて 7 ~ 8 割の圧倒的な得票で選ばれた）

98・3・12

ソルナ市で新たな介護スキャンダルが発覚

フィリップ・ヴォリン 81 歳はルンダ高齢者センターに身体的にはまったく健康な状態で入居した。2 週間後、彼はダンデリュ - ドの救急病院に半ば意識不明で担ぎ込まれていた。フィリップを診察した医師は「これは手抜き介護だ。フィリップはまったく介護された様子がない」と語っている。

昨年の夏ごろからフィリップには痴呆の症状が出るようになった。

「でも、階段は自分で上がっていたし、食事も着替えも自分でできていたんです」

今年の 1 月、妻のマイ＝ブリットは 3 週間カナリヤ諸島に行くことになり、ショートステイを利用した。1 月 29 日にフィリップはルンダ高齢者センターに入所する。

「そのとき職員は、私の夫の面倒はきちんと見るから、安心していらっしゃいと言ってくれたんです」

しかし、2 週間半過ぎて、彼女は親戚に呼び戻される。

「彼の具合が悪いって・・・すぐに戻ったら、彼はもうひどい様子で、死んでしまったのかと思いました」

ダンデリュ - ドの病院医師たちは、ショックを受けていた。フィリップは脱水症状を起こし、ひどい便秘で、床ずれもできていた。

この高齢者センターでは、何人もの患者が瀕死の状態になっていることが明らかになつた。原因は職員の基本的な医療・保健知識が低いことだった。3人の看護婦が辞任し非常勤の職員でやりくりをしている状態だった。

看護婦1人で120人の患者をみたこともあったという。すでに昨年ソルナ市のMASや社会庁に対しても告発はあったということだ。

政治家の責任を問う声も高まっている。5ヶ月ほど前、福祉担当市長であり、福祉委員会の委員長も務めるアンデシュ・ギルナーは昨年秋のポールヘムスゴーデン事件以来、こんなことは2度とソルナで起こらないようにする、と誓った。監査を行うコントロールグループを発足させると約束した。

昨日、市の政治・行政双方の福祉関係者が一堂に会し、緊急会議を開いたが、報道陣に対しては「会議では非常に重要なことを話したが、MASがこれから行う調査の結果が発表されるまでは何もしゃべれない」と口を閉ざした。

アンデシュ・ギルナーとの1問1答は以下のとおり。

なぜあなたが約束した人員増強がまだ行われてないのですか？

「今年の春に行うんだ。しかし、私はもっと多くの人員が必要だと言う警告を受けてはいなかった。フィリップ・ヴァリンのケースは人材の問題じゃないと思うね」

では何が問題なのですか？

「それは調査で明らかになるだろう」

あなたは市のすべての施設を監査するコントロールグループについて話しましたが、どういうわけだか、まだ設置された気配がありませんね。どこに行ってしまったのでしょうか？

「MASが医療監査をはじめている。私は何もかもうまくいっているという報告を受けた」

でも監査はコントロールグループが行うはずだったのでしょうか？どうしてまだ設置されていないのですか？

「今年の春に始まるんだ」

ポールヘムスゴーデンのスキャンダルの後、こんなことは2度と起こらないと言いましたよね」

「われわれは大きな改革を行った。そのうちのいくつかは比較できるほどの変化を遂げるのに時間がかかるのだ」

ほかにも手抜き介護はあるんですか？

「知っている限りでは、ない」

1月には1人の看護婦が社会庁に告発に行きましたよ。

「それは知らなかった。いろいろな情報を知るには時間がかかるんだ」

あなたの仕事はソルナという限られた地区での高齢者福祉でしょう。そのような深刻

な問題は、知っておくべきではないのですか？」

「私が知っておくべきシグナルだった」

「こんな事件が起こった後に、まだあなたは市長の椅子に座り続けるおつもりですか？」

「そんなことを議論する気はない。私が決めることではない」

「それではあなたには何の個人的責任はないと？」

「何が起こったかの調査報告を読んでから状況を判断する」

MAS はいくつかの床ずれがある事実を把握していたが、握りつぶして福祉委員会に報告していなかったことも、その後の調査で明らかになった。彼女は、6, 7 人の床ずれを通報しなかったこと、その床ずれは「報告するのに充分な大きさ」ではないと判断したことを語った。

97・11・14

ISS の職員 抗議の辞職

97・11・18

サーラ また 30000 クローネの賞とる

98・3・13

福祉担当市長と高齢者福祉部長が引責辞任

福祉担当市長アンデシュ・ゲルナーに対する批判は日ごとに高まり、市議会野党の辞任要求ばかりでなく、身内である社民党からも引責辞任の圧力が高まった。社会大臣マルゴット・ヴァルストロームは遺憾の意を表明し、彼は責任を全うしなければならないと述べた。

また、支持母体である年金生活者団体 (PRO) のトップ、ラーゲ・アンドレアソンが「彼は自分の責任を果たさなかった」と言うコメントを発表。追い込まれたアンデシュ・ゲルナーは 16 日 14 時半の記者会見で、自らと高齢者福祉部長マルガレータ・ヘリンの引責辞任を発表した。

98・3・26

Lex Sarah(サーラ法)制定される

今日の Dagens Nyheter 紙の記事によると、社会大臣マルゴット・ヴァルストロームは高齢者福祉の人員増強を約束した。しかし同時に、人員増強だけではすべての問題を解決

するの無理である、とも言った。

「多くの調査でわかったことだが、介護の良し悪しの違いは、金や人手だけによるものではない。総合的な介護理念、よい労働リーダー、職員の能力も、質に大きく影響するのだ」

准看護婦サーラ・ヴェーグナーの内部告発の結果、政府の高齢者部会は4月1日から社会サービス法に新しい条項 Lex Sarah を付け加えることにした。

「この条項は介護職員とその他の人に、深刻な欠陥や虐待を社会委員会、監視機関、その他の責任者に通報する義務を課すものです。今まででは身体的暴力、精神的虐待、手抜き介護や医療過誤を通報する義務がなかったのです」とマルゴット・ヴァルストロームは述べている。

サーラはずっと、このような条項があるものだと思い込んでいた。

「でも私の勘違いでした。それを知ったときは本当にびっくりしたわ。でも、今こそ、そういう法律を作らなくちゃね」